



南極の魚になるべからず

「南極の魚」と聞いて、何を思い浮かべるでしょうか。

大きい魚をイメージするでしょうか。

それとも小さい魚をイメージするでしょうか。

それとも、あんなに寒い所にそもそも魚はいないと想像するでしょうか。

実は、これはちゃんといいます。

しかも、生態にある特徴があります。

南極の魚は、エサが少ないことなどから、海の底の方でじっとして動かず、上からオキアミなどのエサがすぐ近くに落ちてくるのをじっと待っているだけだといいます。

すぐ横の方にエサがあっても、そこへ行って食べようとする意欲もありません。

意欲を出さなくとも、じっとしていればエサが落ちてきて、それだけで生きていけるといいます。

たとえば良いか分かりませんが、私は、子どもたちを「南極の魚」のようにしてはならないと思っています。

大人でも（もちろん私を含めて）、すぐ楽な方に傾くクセがあります。

子どもたちも、放っておけばどんどん楽な方へと流されていきます。

だまってじっとしていれば、大人が何でもかんでも優しくていねいにかみくだいて教えてくれる。

考えなくてもよい。

ただ勉強をしていればよい。

いわれた通りに行い、いわれたことを覚えればよい。

こういうことばかりに慣らされてしまうとこわいです。

いわゆる「指示待ち人間」を育てていく土壌であるともいえます。

だからこそ、与えられるばかりではなく、子どもたち自身が新しい知を求めて自分から動きまわるような状態を作りたいと思っています。

知を求めたり、知を探したり、知を掘んだり。

自ら動く力は、今後一章自分を支えてくれるまさに「生きる力」となっていくからです。

ですから、学習は単なる学習ではなく、人生そのものなのだと思います。

どんな風に取り組むか、自分の苦手や課題にどう向き合うか、乗り越えるのか、あきらめるのか、努力するのか、逃げるのか。

学習を通して、生き方を学べるようになれば最高です。

ですから、子どもたちが自ら動き始める瞬間を、あらゆる学習において追い求めたいと思っています。

先週から『話す・聞くスキル』という音声言語教材に取り組んでいます。



この中には、日本の伝統的な名詩名文や、日本語の語感の面白さを感じられる教材、生活場面における受け答え集、ことわざや慣用句などがたくさん収録されています。

ただ読むだけでも十分に面白い教材ですが、その効果を存分に発揮するべく、読み方にも幾つか工夫を加えています。

読み方の基本は、次の3つです。

○はやく、はっきり、はぎれよく。

本来、「音読」をきちんとするとチームに活気が出ます。

脳研究で知られる東北大学の川島教授の研究によると、脳が一番活性化するのは、考え事をしたり計算をしている時ではなくて、音読をしている時なのだそうです。

声に出すという体からのアプローチが、意識を目覚めさせるのです。

ですが、テンポの緩い、だらりとした音読は逆効果です。

読めば読むほど疲れてしまいます。

そこでまず大切なのが、「スピード感」です。

斎藤孝氏もよく著書で書いていますが、子どもたちが音読をする時は、大人から見て「早過ぎるのではないか」と感じる位でちょうど良いスピードだと言われています。

生き生きとテンポよく読んでいる時は、まさに脳が高速回転している時でもあります。

その「スピード感」を出すべく、少しずつ音読のやり方をカスタマイズしている所です。

子どもたちはぐんぐん上達しています。

そして、何度も読んでいる間に自然と詩文を覚える子が続出しています。

これは、「暗唱」という大切な学習です。

暗唱出来た子はテストを受けていいこととしていますが、その意欲の高さには毎回目を見張るものがあります。

言語や漢字の時間だけでなく、休み時間や朝のマイタイムでも練習する子が出始め、ついには「先生、これ家に持って帰って練習したい！」という子も出てくるようになりました。

中には、体育の時間にかけてっこをしながら口ずさんでいる子たちもいたほどです。

すごい意欲と練習量です。

現在、「春の七草」や「五十音を活用した詩文」、宮沢賢治の「風の又三郎」や「回文」などに取り組んでいるところです。

もしお家でも口ずさんでいる姿を見かけましたら、温かく応援していただければ幸いです。（文責：渡辺道治）

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](https://www.google.com)